

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	村田 彩美	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	<p style="text-align: center;">大学生における過去の相談経験の評価が 現在の被援助志向性に及ぼす影響</p>
------	--

本文概要

【問題】近年、援助要請研究において援助評価という概念が注目されている。援助評価とは「援助をされたときやその後に行われる、他者から提供された援助が自分自身に与えた影響に対する認知的評価」(本田・石隈, 2008)であり、援助要請を予測する変数とされている(齊藤・永井, 2015)。しかし、国内における被援助志向性と援助評価の関連を検討した研究は少なく、十分に検討されていないことが問題点として挙げられる。また、援助評価のような援助に対する評価がある一方で、自身の相談行動内容に対する評価も存在すると考えられる。これまでの研究では、過去の相談行動経験がその後の要請に影響するという結果を示している(大島・久田, 2010)が、いずれも相談行動経験の有無でのみの検討となっており、相談行動内容についての認知的評価という視点では検討されていない。そこで本研究では、過去の相談経験に対する評価を「自身の相談行動内容に対する評価(相談行動評価)」と「受けた援助に対する評価(援助評価)」とに整理し、被援助志向性との関連を検討する。

【目的】研究 1 相談行動評価尺度の作成および信頼性、妥当性の検討をする。研究 2 不安、援助評価、相談行動評価が被援助志向性に及ぼす影響について仮説モデルを構築し検討する。

【方法】研究 1 大学生・大学院生 158 名に無記名式質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、①フェイスシート(性別、年齢、学年、学部)、②相談経験エピソード(仲の良い友人・悩みの種類)③相談行動評価尺度(独自に作成したもの)、④援助要請スキル尺度、⑤言語的援助要請スキル尺度、⑥友人への気遣い尺度であった。研究 2 大学生 382 名に無記名式質問紙調査を実施した。質問紙の構成は①フェイスシート(性別、年齢、学年、学部)、②相談経験エピソード(過去における仲の良い友人・悩みの種類)、③援助評価尺度、④相談行動評価尺度(研究 1 で作成したもの)、⑤現在における仲の良い友人についての質問、⑥特性被援助志向性尺度、⑦STAI 日本語版の特性不安尺度であった。

【結果と考察】研究 1 因子分析を行った結果、「援助の要請」「相手への気遣い」「困っている状態の説明」「相談相手の選択」の 4 因子 25 項目が得られ、相談行動評価尺度が完成された。信頼性、妥当性も確認された。研究 2 因子構造の確認：確認的因子分析を行った結果、相談行動評価尺度のみモデル適合度が不十分であったため、探索的因子分析を行った。その結果、「状態と要請の伝達」、「相手への気遣い」、「相談相手の選択」の 3 因子 23 項目が抽出された。仮説モデルの検証：仮説モデルを検証するため共分散構造分析を行った。その結果、十分な適合度が得られなかったためモデルを再構築し分析を行った。その結果、十分なモデル適合度が得られた。「状態と要請の伝達」は直接的に、あるいは援助評価の肯定的評価を媒介して被援助志向性を高めていた。「相談相手の選択」では、援助評価の否定的評価を媒介して、被援助志向性を高めることが明らかとなった。このことから「状態と要請の伝達」「相談相手の選択」が低い人においては援助要請スキルトレーニングなどの行動面への介入を行うことが効果的であると考えられる。「相手への気遣い」の高さは、直接的には被援助志向性を下げてしまうが、援助評価の肯定的評価を媒介することで被援助志向性を高めることが明らかとなった。このことから、「相手への気遣い」だけを高める介入よりも、「状態と要請の伝達」を一緒に高めるような援助要請スキルトレーニングやアサーションスキルトレーニングなどの介入が効果的であると考えられる。**【主要な引用文献】** 齊藤翔悟・永井智 (2015). 援助要請における援助者の応答が援助評価と援助請意図に与える影響 立正大学心理学研究年報, 6, 67-73.